日本語教育における自己を表現する力の育成について
「形式へのこだわり」意識の変容の考察を通して

陸　麗青

概要

本稿は「形式へのこだわり」意識の変容と自己表現力の獲得について考察することを目的とする。まず「形式へのこだわり」意識とはなにか，自己表現力とは何かについて論じることを試みる。次に，授業データ分析を通して，両者の関係性について考察する。

キーワード：「形式へのこだわり」意識，自己を表現する力

1　はじめに

本稿では，日本語学習者の「形式へのこだわり」意識について論じる。「形式へのこだわり」意識の変容は自己を表現する力への獲得につながるものであるというのが本論の趣旨である。

日本語学習者の学習の目的は日本語で自分の考えを表現することによって他者とコミュニケーションできるようになることであると筆者が思う。

日本語学習者の間に日本語での自己表現能力が伸び悩むと感じる人は少なくない。なぜ伸び悩むのかというと，コミュニケーションの場で常に自分の話している日本語の形に囚われているからだ。日本語で話すとき，いつも「ここは間違っている，そこも間違っている」という不足感に縛られて，日本語で他の人とコミュニケーションできた楽しさと満足感を味わえない。要するに，「自己表現能力＝日本語の形式」というような意識を多くの学習者が持っている。それで，語彙・文法・

文型を積み上げれば，自己表現能力を向上させることができると思い込んでしまう。しかし，実際に，いくら文法・文型など言語の量をストックしても，自己表現能力の向上にはなかなか結びつかないという経験を持つ人も少なくないだろう。

周知のように，人は前後の文脈や表情，その場の雰囲気など，状況全体の中でコミュニケーションを行っている。人と人のコミュニケーションは柔軟な表現で支えられていて，形式の多少の間違いは相手との意思を通じ合わせる場面で，ほとんど問題にならない。だから，コミュニケーションの場で大切なのは「正しい形式」でどう表現するのではなく，自分の考えていることを他者に伝えることである。

しかし，従来のネイティブを目標とする文法，文型積み上げのクラスでは，「形式の正確さ」が強調され，学習者は「形式へのこだわり」の意識からなかなか抜け出せない。筆者は自らの学習経験および他の学習者への観察からこのような意識はコミュニケーションを妨げてしまうことがあると感じた。したがって，筆者は日本語で自分のことを表現する力を獲得するには学習者をこのような「形式へのこだわり」の意識の束縛から解放させる必要性があると思う。

1.1　「形式へのこだわり」意識とは何か

従来の第二言語習得においては目標言語「習得」を目標とする，目標言語に不足感を抱く学習者は少なくない。その不足感のために，「形式へのこだわり」意識を強く持っている。話す時，書くときに常に自分の話している日本語の形が文法にあっているかどうかにとらわれて，自由に自分の言いたいことをいえないことがある。コミュニケーションの場では常に自分の日本語に自信がない。

ここでは「形式へのこだわり」意識とはある言語を第二言語として学習する学習者は自分の考えていることを目標言語で表現する際に，文法的に正しいかどうかということに拘泥する意識を指す。なぜこういう意識が生まれたかその原因を突き詰めていくと，従来の第二言語習得教育においてはネイティブを目標としていることに深く関わっていると考えられる。田中（1997）はネイティブを目標とする第二言語習得教育において，学習者が目標言語を学習する最終段階に到達するまで，「不完全である」とか「足らない」という気持ちから逃れることができないとした。

従来の文法・文型積み上げ式のクラスでは担当者は学習者の未習の部分を補充し，いかに効率よく学習者に目標言語を「習得」させるのかということに躍起になっていて，学習者の「形式へのこだわり」という意識を増幅させる一方である。「形式へのこだわり」意識を持つことによって，コミュニケーションの場で自分の

話している言葉の形式にとらわれ，他者とコミュニケーションできた満足感と達成感をなかなか獲得できない。

1.2　自己を表現する力とは何か

この節では自己を表現する力とは何かを先行研究を概観しながら，考察していきたい。英語教育においては自己表現力を養成する必要性が唱えられてきた。吉田研作（1997，p.225）ではコミュニケーションに必要とされることは，単なる会話とは違い，対話者同士が意見の調整を行うためには，その当事者がそれぞれ自分の考えをしっかり相手に伝える，という「自己表現力」を身につけることが必要だということが分かると述べている。しかし，吉田は「自己表現力」を育成する必要性を唱えたものの，「自己表現力」とは自分の考えをしっかり相手に伝える力というふうに捉えるにとどまった。一体自分の考えをしっかり相手に伝えることとはどういうことなのかについての明確な説明には及ばなかった。「自己表現力」とはやはり抽象な概念として提示された。

自己を表現する力を育成することの重要性は日本語教育においても重視されている。清（1990）は，「自分の意見を日本語で論理的に構築し，的確に伝達し，聞き手を説得する能力を養うことが必要」であるとした。西口（1998）は自己表現能力を育成するカリキュラムを提示した。しかし，西口（1998）には自己表現能力は「一定の話題の範囲で自分のことについて話せるようになるというふうに述べるにとどまり，それについてのはっきりした定義を言及しなかった。日本語学習者が必要とされる自己表現力は一体どういうものなのかについてまだ議論の余地がある。したがって，筆者が自己表現力について論じる必要があると思う。

筆者が考える自己表現力とは自分の考えを相手に伝えるときに，ちゃんと理由や根拠を述べる力である。ただ自分の意見を出すだけではなく，なぜわたしはそう思うのかその理由や根拠をきちんと述べる力こそはコミュニケーションの場で求めている自己を表現する力であると思う。なぜかというと，自分の意見を他者に向けて述べるときに，自分の意見の理由や根拠などをきちんと述べなければ，相手に納得させることができないと言うことは誰しも経験したことがあるからだ。異なる他者との関係を構築するには，自分の意見を持って，自分の意見を明確に他者に伝えることは非常に重要なことである。自分の意見を明確に他者に伝えることとはなぜわたしはこう考えるのか，その理由付けや根拠をきちんと考えて述べることと考えられる。今までの日本語教育においては学習者の自己表現力を高めるには日本語の文

法・文型などの知識を習得させることに重点が置かれてきたが，しかし，形式さえ正しければ，自己を表現する力が高いとは決してイコール関係ではないと筆者が思う。他者とコミュニケーションする時に，たとえ形式に多少な間違いがあっても，自分の考えの理由や根拠などをきちんと示し，筋道が通れば他者には自分のことを理解するには問題ないと思う。

1.3 「形式へのこだわり」意識の変容と自己を表現する力の獲得との関係

ここまでは「形式へのこだわり」意識と自己を表現する力について述べてきた。では，両者はどのような関係があるのか。筆者は自身の日本語の学習経験及び他の学習者への観察によって，次のようなことに気づいた。多くの日本語の学習者は日本語で他者とコミュニケーションをするときに，自分の話している日本語は文法にあっているかどうかを気にしていることがわかった。このような「形式へのこだわり」意識を過剰に持つと，自分の言いたいことを自由に言えなくなり，常に弱者意識に束縛され，他者とのコミュニケーションを阻む要因になることがある。要するに，「形式へのこだわり」意識は日本語学習者の自己を表現する意欲を影響し，自己表現力の獲得にマイナスに影響することがある。

筆者は 1.2 にすでに述べたように自分の考えを相手に伝えるときに，ちゃんと理由や根拠を述べる力を自己表現力と捉えているので，コミュニケーションの場で話していることばの形式より，自分は何を考え，どうしてそのように考えるのかという理由や根拠を明確に述べることは重要だと思う。

「形式へのこだわり」意識を過剰に持つと，コミュニケーションの場で自分の発している言葉の形式ばかりを考えてしまって，自分の発言の内容の面，つまりなぜ私はそう考えるのか，自分の立場について，自分の意見をしっかりと考えることができなくなり，最終的に自己を表現する力を獲得しにくくなる。

以上述べてきたように「形式へのこだわり」意識を過剰に持つと自己表現力の成長に悪影響があるということがわかる。したがって，自己表現力の獲得には「形式へのこだわり」意識の変容が必要だと思う。言い換えれば，「形式へのこだわり」意識の変容は自己表現力の獲得につながるものであると考えられる。

次は具体的なデータを通して，「形式へのこだわり」意識と自己表現力の獲得とのかかわりを論証してみる。

2　授業データの分析

2.1　分析データについて

対象授業　早稲田大学日本語研究教育センター・別科日本語専修課程における 2005 年春学期「日本語 4 β」〔コーディネータ：細川英雄，週 9 コマ（1 コマ 90 分)〕。この授業では次の 3 つのレポートについて書く活動を行う。

1. 自己紹介文を書く。
2. 「魅力的な人」についてレポートを書く。
3. 「自分の好きなテーマ」でレポートを書く。

分析対象者　学習者 C

分析データ

1. 授業担当者が作成した授業記録 1
2. 授業を記録した MD の文字化資料
3. 学習者 C へのフォローアップインタービュー

データ選定理由

1. 日本語 4 β をデータとして取り上げた理由はこのクラスは総合活動型の日本語クラスであり，活動の内容は文法・文型などを中心とするのではなく，学習者一人一人の考えていることを活動の内容とする。このように学習者一人一人の考えていることを内容とするクラスでは学習者が「形式のこだわり」意識から解放され，自由に自分のことを伝えることができる可能性があると筆者が感じている。具体的には，クラスの初めの頃，学習者向けのクラス紹介に次のように説明している。「日本語 4 β」というクラスは自分の「考えていること」を他者に対して表現できるようになることを目的とする。そして，日本語を使って，自分の「言いたいこと」「話したいこと」「考えたこと」を表現して相手に伝えると同時に，相手の話を聞きながら，自分の考えを広げたり深めたりしていく力をつけることを活動の目標とする。
2. 筆者はボランティアとして参加していたクラスである。
3. 学習者 C は「日本語 4 β」に参加し，活動の前後「形式へのこだわり」意識の変容が観察できた。

2.2 分析方法

1. 学習者 C の「形式へのこだわり」意識の変容を授業記録，フォローアップインタービューを用いて，彼から他の学習者へのコメントの内容と質の変化を分析する。
2. 1. にもとづいて，「形式へのこだわり」意識の変容は自己を表現する力の獲得につながることを考察する。

2.3 データ分析

2.3.1 「形式へのこだわり」意識

活動の前半，C は「形式へのこだわり」意識を強固に持っていることが活動の記録や活動の中での C の発言からも伺える。その表れは次の通りである。活動の 2 週目の時，3 β 1 の学生 A のレポートについて検討している時，4 β の学生はその学生のレポートにたくさんの間違いがあることに気づき，それをきっかけに「先生は間違いを直すべき」と言う声が出始め，授業中に形式をめぐるやりとりがあった。

以下は詳しい記録である（4 月 21 日の授業記録）

（前略）＊ A さんのレポート検討のさなか，学生が助詞のミスを指摘し「これは 3 ベータの先生が注意しないんですか？」と言い出し，「先生が注意するべきだ」という話から，グループで検討する意義についての話し合いを急遽することなる。（自分たちのレポートにも同じようなミスが多くあると感じたのかもしれない）以下，大まかなやりとり。

S： 最後に先生がチェックするべきだ。

T： チェックしてくださいと言われて赤ペンで直すことはできない。言いたいことをどういう風に言えば良いのかを話し合っていけば，よくなるはず。

S： お互いのレポートを読んで，コメントしあうという方法は本当に勉強になると思う，でも，最後は先生にチェックしてもらいたい。

T： じゃあ，何のために話し合っているんですか？教師が直したからといって，日本語はうまくならないのでは？

S： 自分の弱点を意識したい

など，延々 40 分以上話し合い。

結局，レポート全部のミスを指摘するという意味ではなく，「重大なポイント（文法項目？）」でほかの学生が指摘しなかったものについて，出来る範囲で指摘するということで決着した。こちらからお願いしたいこととして，自分の日本語に自信と責任を持つこと，（辞書にありました。いいですか？は受け付けない等）を確認。

授業に関するコメント

（前略）C さんは自分で勉強するから大丈夫と言っていたのですが，特に W さん，N さん（2 人とも，まだあまり自信がないからだと踏んでいるのですが）から強く要望がありました。

以上の記録の中にその時点で「C さんは自分で勉強するから大丈夫と言っていたのです」とあった。彼は正しい形式にこだわっていないように見えた。しかし，その後の活動及び彼へのインタービューによって分かったことは彼がその後のレポート「魅力的な人について」を書くとき，クラスの外に，日本人の友だちに自分の書いたレポートを修正してもらったことがあった。授業中は「大丈夫」といったかといって，「形式へのこだわり」及び自分の日本語の不完全さへの心配はやはり彼の中に強固にあると言えよう。

次はそのことを裏付ける記録である。C は 4 β の 2 番目の活動――魅力的な人について書く活動のはじめの頃に，自分のレポートを教室外の日本人の友だちに直してもらったことがある。そのことについて授業担当者の 5 月 11 日の授業記の記録があった。

次回担当者への申し送り事項 1

特にありませんが，C さんが先ほど ML に出してきたメールに，「友達に直してもらった」という文章があったので，ちょっと気になりました。

以上の記録から，5 月 11 日 C さんは ML にレポートを提出すると同時に，「友達に直してもらった」というメッセージを送ってきたとわかる。このことから見ると，その時点，C さんは自分の書いているレポートの中にある間違いを気にしていたことが分かる。そのことについて活動のあとに筆者は C へのフォローアップインタビューで C が文法など形式の間違いについての考えを聞いた時に，C は次のように当時の自分を振り返っていた。

インタビューの実施日：2005 年 12 月 21 日

L：　最初に，4 β に入った時，やはり自分の書いた文章の形式の面で，例えば，

文法とか，文型とかあるいは語彙とかを間違ってるということを気にしましたか。

C： 最初はそうですよ。その間違っている部分を他の日本人の友だちにすみません，見てください，それは多いです。教えてください。(1)

(1)C の話からも彼は活動の初めには自分のレポートの中にある間違いを気にしていて，自分の日本語に自信がなかったということがわかる。日本人の友だちに直してもらうことが多かったということからも彼は「形式へのこだわり」意識を強く持っていることと言えよう。そこで，自分の書いたレポートをネイティブに直してもらうという行動から見ると，活動の前半の C さんは形式を通して自己を評価していると考えられる。「形式へのこだわり」意識を強固に持っているため，活動の前半でクラスでの発言や他の人へのコメントも文法や漢字表記など形式の間違いについての発言が多かった。次の枠に示したのは活動の前半，C からほかの学習者へのコメントを抽出したものである。そのコメントの内容からも当時の C は「形式へのこだわり」意識を持っていることが分かる。

● 4 月 15 日（金） 合同授業 文字化データ

C： はい。質問があります・8 行目，私はずっとから，ずっとからって？ずっとこんな思いがあります。でも，どうしてからを使いました。（文法の指摘）

● 4 月 18 日（月）文字化データ

C： あります。2 段落の下から 5 行目，自信を失うようなことがある。失うようになることはちょっと。意味わかりますけど，使い方はわからないです。失うようになる。この使い方はなんかちょっと変だとおもいます。(1) （文法の指摘）

● 4 月 19 日（火）文字化データ

C： 文法について問題があります。二つの段落の最後の修業などが，そのががいいですか。（文法の指摘）

C： すみません，その前の段落，その上，その段落 1 行目の最後，不可欠なもの，その不可欠なもの，それはもしかして，なとの大丈夫ですか。（文法の指摘）

● 4 月 20 日（水）文字化データ

C： 実はちょっと問題があります。文章の中に第 1 ページ後ろから 2 行目，留学の間に色々な国からの友だちができたが，そのだがの意味はちょっと (2)（文法の指摘）

C： すみません，後ろの第 1 行目，自分の国に母語だけ話すし，その国には国で

のほうがいいです（文法の指摘）

● 5 月 9 日（月）文字化データ

C： 第 2 段落目上から 6 行目，魅力的な人はいつも友だちであるのに，たくさん友だちは魅力ではない。これは意味はわかりますけど，でも，ことばの使い方はちょっと初めて読むときはちょっとええという感じがあります。(3)（感想）

2.3.2 「形式へのこだわり」意識の変容

2.3.1 から活動の最初に C は「形式へのこだわり」意識を持っていたとわかる。しかし，活動につれて，C の意識が変容し始めた。その意識の変容は C 自身も気付いた。次は C へのフォローアップインタービューの抜粋である。

2006 年 12 月 21 日彼へのインタービューの抜粋である。

L : 筆者　C : 学習者 C

L： 最初に，4 β に入った時，やはり自分の書いた文章の形式の面で，例えば，文法とか，文型とかあるいは語彙とかを間違ってるということを気にしましたか。

C： 最初はそうですよ。その間違っている部分を他の日本人の友だちにすみません，見てください，それは多いです。教えてください。そして，だんだん授業が進むにつれて，そんな小さな間違いにはあまり気にしなくなってきました。とりあえず，自分の内容は相手に伝わっているのかどうかわかりません。それが中心になりました。(1)

L： どうして, そういうふうに変わったのか。そこは何かきっかけがありますか。

C： みんなが間違っているから，そして，間違ってもあなたの言いたいことが分かってる。だからそんなにこだわらなくて，だから，とりあえずどうやって自分の考えを伝わる。もし，問題があるなら，みんながコメントしますね。そのコメントする間に，ああ，それは間違っているか，他の言葉で変えようとか，例えば，その単語の使い方があまりわからないから，じゃ，他の単語を使って自分の考えを説明する。それはすごく面白い。(2)

L： やっぱり自分の考えは他の人に伝わったということがすごく楽しくて，それで，文型文法などの小さなミスはそんなに大切じゃない。

C： 実は本当に小さいミス。例えば，はとがのちがいとか，それは本当に小さなミス。でも，単語の意味，例えば，あいまいとか，単語の使い方，漢字など

はこだわっています。例えば，今書いている文章，「変化」，変えると変わる，この二つが似ているけど，実は違います。それは自動詞，他動詞だけじゃなくて，自分の意識で何かを変えること，変わるは無意識で，その変化を感じること。だから，その字が簡単ですけど，その後の隠されている意味は深くて，そのことはこだわっています。(3)

L： まあ，文法的にはあっていないかもしれないけど，自分はそういうふうに書くのは自分の意思がある，自分の意図がある。例えば，前の好きのなんとか，どこにある，どこにいるがあったじゃないですか，そのときはみんなはどうしてそのときはいるをつかったのか，あるじゃないの。でも，C さんの考えではどうしているのか，それは説明

C： そうそう。それは説明して，そういうのにこだわっています。

以上のインタービューを通して，C さんは 4 β の活動の中で最初に形式にこだわり，だんだん自分の考えていることが他者に伝わったかどうかということに目が向けていくことが分かった。それは活動の前半において，C は自分に対する評価はまだ形式の面にとどまったが，活動が進むにつれて，自分への評価の基準はだんだん「自分の考えていることが伝わるかどうか」ということに変化したといえよう。その変容を促した原因を聞いたら，「間違ってもあなたの言いたいことが分かってる。」という C は答えた。彼の答えから活動が進むにつれて，C は文法的に多少間違っても自分の言いたいことは他の人に通じることに気づかされたといえよう。C さんは自分の考えを他の人に伝わるように自分で色々試してことばを探している過程に面白さと楽しさを感じるということが分かった。それもある意味で 4 β で C さんは「形式」の縛りを感じなくなって，自分の考えていることを表現する楽しさと満足感を味わえたのではないか。そして，形式へのこだわりも質が変わってきたことが分かる。インタビューの中では「その字が簡単ですけど，その後の隠されている意味は深くて，そのことはこだわっています。」と C さんの一言は印象に残った。要するに，彼はこまごまとした形式の正しさを求めるから自分の意図，自分の言いたい気持ちにぴったり合う表現を探すようになった。表現に託された深い思いを探っていくようになったとも考えられる。

では，このような C の意識の変容は活動の中でのどの時期に発生したのか。次の C のインタビューの中ではそのことが明らかになった。

2005 年 7 月 15 日 C さんへのインタービューの抜粋

C： 最初は桜，だんだん力がついてきて，魅力の人についてレポートを書く時，

みんなの文章は突然にレベルアップしました。約 2 週間経って，いろいろなアドバイスをしてから，みんな文章のレベルはすごく上がってきました。文章は 70 %完成してから，みんなのアドバイスもだんだん厳しくなってきた。だから，その時，もうこの漢字が間違っているとかじゃなくて，ここの考え方はちょっと変ですよ。そういうアドバイスは出てきました。だから，その時はみんなはレベルアップしてから，僕はみんなはすごい。僕ももうちょっとみんなと一緒にみんなのようなレポートを書きたいです。

以上の C の語りから，C はこのクラスの 2 番目の活動――「魅力的な人」について書く活動が 2 週間が経過し，3 週目（5 月 13 日，5 月 16 日あたり）に入る頃，「形式へのこだわり」意識が変容し始まった。この時期は活動の中で C から他の人へのコメントの内容と質の変化の時期にも一致している。そのコメントの内容と質の変化は次の節で分析する。「魅力的な人」について書く活動が 3 週目にはいる頃はちょうどこのクラスの活動が 1 ヶ月経過にあたる。前述のインタービューにもあったように，この一ヶ月の活動を通して，他の学習者の変容の影響も受けながら，C が「形式へのこだわり」意識からだんだん脱却し，考えが伝わるかどうかに注目してきた。以上のインタビューによって，彼は授業の中で，他の学習者の変化を注意深く見ていることがわかる。その部分を見ると，他の学習者のコメントの変化に気づいて，そのコメントは小さな形式の間違いからだんだん考え方の筋が通っているかどうかという内容へシフトしてきたことに彼は刺激を受けて，「みんなのようなレポートを書きたい」という一言から，彼は活動の中で自分のレポートの内容に目を向けてきて，自分のレポートの内容の面の深さを追及したいという考えが現れたのではないか。では，C が活動の中で他の学習者のコメントの変化に気づき，それは活動の中で彼が他の人へのコメントの内容と質の変化にどういうふうに反映したのかを次の節で分析していきたい。

2.3.3 意識の変容がもたらしたコメントの内容と質の変化

前述のように C は 4 β のクラスでは活動の前半と後半において「形式へのこだわり」意識が大きく変容した。では，こういう意識の変容は活動の中で C さんは他の人のへのコメントの内容と質にどういう変化をもたらしたのかを授業記録及び MD の文字化資料を通して考察していきたい。

活動の前半では C は他の人にコメントする時，文法や語彙や表現など形式についての問題点を指摘するものが多かった。詳しくは次のようなコメントが見られる。

● 4 月 15 日（金）　合同授業　文字化データ

C：　はい。質問があります・8 行目，私はずっとから，ずっとからって？ずっとこんな思いがあります。でも，どうしてからを使いました。（文法の指摘）

● 4 月 18 日（月）文字化データ

C：　あります。2 段落の下から 5 行目，自信を失うようなことがある。失うようになることはちょっと。意味わかりますけど，使い方はわからないです。失うようになる。この使い方はなんかちょっと変だとおもいます。(1)（文法の指摘）

● 4 月 19 日（火）文字化データ

C：　文法について問題があります。二つの段落の最後の修業などが，そのががいいですか。（文法の指摘）

C：　すみません，その前の段落，その上，その段落 1 行目の最後，不可欠なもの，その不可欠なもの，それはもしかして，なとの大丈夫ですか。（文法の指摘）

● 4 月 20 日（水）文字化データ

C：　実はちょっと問題があります。文章の中に第 1 ページ後ろから 2 行目，留学の間に色々な国からの友だちができたが，そのだがの意味はちょっと (2)（文法の指摘）

C：　すみません，後ろの第 1 行目，自分の国に母語だけ話すし，その国には国でのほうがいいです（文法の指摘）

● 5 月 9 日（月）文字化データ

C：　第 2 段落目上から 6 行目，魅力的な人はいつも友だちであるのに，たくさん友だちは魅力ではない。これは意味はわかりますけど，でも，ことばの使い方はちょっと初めて読むときはちょっとええという感じがあります。(3)（感想）

このように活動の初めの頃の C から他の人へのコメントの内容はこまごまとした文法の間違いを指摘し，質問を投げかけた発言が殆どだ。それは当時彼は「形式へのこだわり」意識を強く持っているからこそ，ほかの人のレポートを読むときにもっぱら文法があっているかどうかという文章の形式にとらわれていると考えられる。それから，問題点を指摘する時に，なぜ問題だと思うのかと自分の意見の理由や根拠などについてはっきり述べていなかった。上記のデータの (1)，(2)，(3) の所に，C がクラスメートのレポートを読んで，自分が問題点を指摘したときに，よく「なんかちょっと変だと思います」。「ちょっとええという感じがあります」とい

うように問題だと思っているが，しかしどうして自分が問題と思うのかその理由がはっきり述べられなかった。

しかし，活動の半ば C の意識の変容につれて，C さんは他の人へのコメントの内容は明らかに変化が見られた。C のコメントは活動の前半でこまごまとした形式の間違いのコメントから相手のレポートの構成や内容や書き手の考えそのものにシフトしてきた。

詳しくは次のようなコメントがある。

● 5 月 13 日

C： 今，「SH さんのこと」⇒「魅力という言葉の説明」⇒「SH さんのこと」という流れになっているが，最後がわかりにくい。「魅力という言葉の説明（理論）」⇒「SH さんのこと」というのはどうか？ (1)

● 5 月 18 日

C： この発展はいいが，2 ページをかけてスさんとの旅のことを書くのはちょっと長い。今の結論をもっとはっきり書くといい。今は旅が大きすぎ，結論が小さい。(2) （感想↑問題点↑助言）

C： 多分，ビルみたいに，一階にスさんがいて，その上は A。だから，今の A があるのは，スさんの影響だから，それを書くといいのでは？ (3) （感想↑助言）

● 6 月 14 日

C： でも，一つの問題がありました。その段落の一番前，その考えによって，でも，その考えは経済性と文化はどちらが重要ですか。でも，この後ろの段落は自分の意見をまとめて，それは文化だけ，歴史だけを書いています。でも，経済について書いていない。だから，問題になると思って，その感じがする。その意見は一つだけだから，比べてない。その考え方。この考え方によって自分の意見をまとめてはその考えについて自分の意見を加えて，比べて，そして自分の結論を出す。でも，まだ半分しかないから。もうちょっと経済について自分の考え方を (4) （問題点の指摘＋アドバイス）

● 6 月 22 日

C： わたしは，自分の音楽は僕はトランペットを吹くからステージの上でと下でとは全然違う感情がある。ステージの上で音楽は自分の呼吸みたい。もっと自分にとって何かを詳しく書くといいと思う。(5)（自分の場合↑助言）

C： 多分，対話の部分をもう一度整理した後はまた新しいことが出てくるかもし

れない。僕は○○さんとの対話何度も読み返してだんだん深くなってきた。もう一度動機で，対話を整理したらもっとつながっていることは出てくる。(6) （感想↑自分の経験↑助言）

● 6 月 27 日

C： いいたいことはわかるけど，その感じが J さんにとってどういう意味があるのかを知りたい。それがおもしろいかとか。J さんの考え方がわかるから。それが J さんにとってどんな意味があるのか，という自分のつながりそれに興味がある。実は読みたいのは J さんにしか書けない文章だから。(7) （感想↑問題点指摘↑感想）

● 7 月 5 日

C： 自分の心が何が足りない？多分今僕はもっと美しくなりたい，かっこよくなりたいとか。まだ変わるところがあるから，自分がもっと良くなりたい。S はどこが？不満足とか，まだ足りないと思っているところはどこですか？(8) （問いかけ↑自分の場合↑問いかけ）

上述の通り，活動の半ばから C のコメントの内容ははっきりした変化が見られた。C のコメントの内容は書き手のレポートの構成（(1)，(2)）書き手の考え方そのものを問うもの（(4)，(7)，(8)）が中心になってきた。そのコメントの内容の変化から，C は他の人のレポートを読むときにだんだん文法など形式があっているかどうかということから書き手の考えている内容を深く追求していくようになってきたと言えよう。つまり，彼の注目の方向はだんだん形式から内容へと深化してきた。それから，コメントの内容の変化と共に，コメントの質そのものも向上してきたことがわかる。活動の最初 C のコメントはいつも問題点を指摘しっぱなし，問いかけばかりをしていたが，活動の半ば（5 月 13 日から）に C のコメントは問題点を指摘するだけではなく，解決策も考えていくように助言することが多くなり（(1)，(2)，(3)，(5)，(6)），活動の後半（6 月以降）に入ると，さらにコメントをするとき，よく自分に引き付けてコメントするようになってきた（(5)，(6)，(8)）。それから，活動の前半の C から他の人へのコメントを比較すると，活動の半ばから C が他の人のレポートの問題点を指摘する時に，なぜ自分が問題と思うのかと自分の考えの理由をはっきり述べるようになってきたことが分かる。例えば，上記の枠の中に示した 5 月 18 日に C が A さんのレポートの構成のバランスの問題を指摘する時に，「2 ページをかけてスさんとの旅のことを書くのはちょっと長い。… 今は旅が大きすぎ，結論が小さい。」と理由をはっきり述べていた。また，6 月 14 日

に N さんのレポートの問題について指摘する時にも，「この後ろの段落は自分の意見をまとめて，それは文化だけ，歴史だけを書いています。でも，経済について書いていない。だから，問題になると思って，その感じがする。」とはっきりなぜ問題と感じるのかその根拠をきちんと示している。それは C が他の人のレポートを読むときに，問題と思うところをなぜ問題だと思うのかということを深く考えてきた証拠になるだろう。このように活動の中で C から他の人へのコメントの質は明らかに向上してきたことが目に見える。

今まで活動の中で C の他の人へのコメントする力の成長ぶりを見てきた。C へのインタービューの中で，C は活動の中で自分の日本語の力の成長を感じているとわかった。

インタービュー実施日：2006 年 12 月 21 日

L： 前期は縦と横両方入って，やっぱり今回入って，だんだん自分は支援というか，コメントの仕方だんだん分かってきたというのはありますか。

C： たぶん，ポイントを中心にコメントするのはできるようになったと思う。人の文章を読んで，どの部分，色々な質問がありますね，でも，一つずつ聞くとか，確認とかできないですよね。だから，中心をとらえてコメントをする，これは僕はできる。

L： できるようになった？

C： そうですね。色々コメントしているから。そして，もう一つ，そのコメントに対して，相手がどの文章になる。ただの質問じゃなくて，たぶんこの文章に対してこれからのいく，進み方向とか，それについてコメントしたいですね。足りない部分がもっともっと書けば文章はもっとよくなる。テーマを，それを相手に知らせて，その部分は。

L： じゃ，今 6 β とかのクラスにもそういうふうにコメントをしていますか。

C： そう。そんなことをしています。今は細かいコメントをしなくて，いつも中心を，いつもひどい

L： ひどい？

C： いつも厳しいコメントをしています。

L： 4 β でみんなはやっぱりコメントは厳しいから，それで慣れてきて，他の人のレポートを見る目も厳しくなるかな。

C： そうね。だって，僕の標準は高いから。たぶん，他の人の文章を見ると，いつも，もし，僕が書いたら，何がかけますか。そのことを考えていますね。

僕の場合は国際結婚について何々を考えています。あなたの意見は僕思っているのは何々をする。それは自分が考えて，その違う点を分かってて，その相手を聞きます。だから，自分がもう，自分の考えを持っていてから，相手の意見を聞きます。そして，相手の答えと自分の答えをもう一度考えて，もしあったら，それとも，相手はちゃんと説明，説得すればまあ，それはいい答えです，説得できない場合は，まだまだ。コメントは次々と出てきますから。

L： それで，なんかだんだん自分も考えて，他の人を説得するために，自分も考えて，説得できない場合はもっと考えるんですよね。また日本語で表現して，そういうやりとりの中で

C： 自分の日本語の力も伸びてます。

L： 伸びてるって感じますか。

C： だって，自分が，相手の意見がいいますよね。それどうやって自分から相手に自分の考えをわかるようになる。逆にこっちから相手を説得する。その分からない理由をちゃんといって，そして相手に伝えて，どうして分からないのは，その相手を説得して，相手もああ，なるほど，足りないかな。だって，自分のレポートを書いて，僕は完璧だ，説明しなくても大丈夫。そんな感じがありますよね。でも，こっちは読んで，その足りない部分は，でも，その足りない部分を相手にちゃんと伝えなければならない。だから，その部分は工夫しなければならない。その自分の分からない感じを相手に説得すること。だって，これは足りない。どうして？なんとなく。それは話にならない。それは問題になる。

L： じゃ，この授業を受ける前に，自分はそういう面ではどうですか。相手の文章を見て，自分の意見を言うとかそういうのは今と比べると，どうですか。

C： 前はできない。前はなんとなく分かる。そして，ちゃんと自分の意見を言えない，そして，相手に自分の意見を説得することができない。言いにくい。たぶん，自分も問題の中心を捉えなかった。でも今はできる。人の文章を読んで，すぐ中心が分かるから。

L： やっぱり読む力も付いてきたということですか。

C： 考える力。そして，日本語，文章を読んで，考えますね。考えないと，中心はどこ分からないですね。そして，考えて，その中心点を捉えて問題を考えますね。その中心点からの説明が足りるかどうか。そして，たぶん説明します。たぶん，それは横 β の訓練と関係します。

上述のインタビューの中の C の発言を見ると，彼はこのクラスを通して自分の成長を実感していることがわかる。つまり，クラスの中で他の人へのコメントする力の成長は具体的に彼の話の中では「中心をとらえてコメントすることができるようになった」，「ただの質問じゃなくて，たぶんこの文章に対してこれからのいく，進み方向とか，それについてコメントしたいですね。足りない部分がもっともっと書けば文章はもっとよくなる。テーマを，それを相手に知らせて，その部分は。」と言うふうに表現された。これは活動の半ばからの彼のコメントの内容と質の特徴に一致している。それから，他の人のレポートを読んで，コメントをするという活動の中で彼は自分の日本語の力は確実に伸長してきたと感じた。その部分の発言から，C は他者へ自分の意見を言う時に，ちゃんと自分の考えの理由や根拠を示して話すことの重要性を活動の中で意識してきたことがわかる。そして，彼自身は活動の中で自分が意見を言う時に，自分の理由や根拠をきちんと説明してコメントすることができるようになったということが彼の話から判明できる。さらに，このクラスで獲得できた力は他のクラスでの活動にも影響していることがわかる。インタビューの中で，C は「今はいつも細かいコメントをしなくて，いつもひどい，いつも厳しいコメントをしています」と言うふうに他のクラスでの自分を内省している。「細かいコメントではなく，ひどい，厳しいコメント」とはつまり文法・語彙などのこまごましい形式面から相手の考えや内容などを鋭く追究するようになったと推測できる。

3　考察と今後の課題

本稿で分析対象として取り上げた C さんは活動の最初に「形式へのこだわり」意識を強く持ち，自分の日本語に自信がなかったが，活動の中で発言も日本語の文法・文型などに関するものが多かった。それは「形式へのこだわり」意識が強く働くと，学習者の注目の内容はおのずとことばの形式に行くことが反映されたといえよう。それから，活動の進行につれて，C は他の人とのコミュニケーションの中でたとえ間違いがあっても意思疎通にそれほど問題がないということ，つまり人と人とのコミュニケーションが柔軟な表現で支えられていることに気づかされ，彼自身の「形式へのこだわり」意識が緩んできて，変容した。その変容に伴い，彼はもっと自分の考えが他の人に伝わるかどうかに注目し，他者へのコメントも次第に他者の考えを追究するような内容にシフトしてきた。このようにコメントの質の向上から C の自己表現力が高まってきたと言い換えることができるだろう。このクラス

の中で彼は「形式へのこだわり」意識の束縛から解放され，他の人とのコミュニケーションの中で自分の意見を述べるときに，なぜ自分がそう考えるのか自分に向き合って，ちゃんと自分の意見の理由付けを明確に伝えることができるようになった。このような C の自己表現力の成長は活動の中で彼の「形式へのこだわり」意識の変容に関係があると本稿の分析から分かった。

ここでもう一度「形式へのこだわり」意識の変容と自己表現力の獲得との関係性をまとめてみたい。「形式へのこだわり」意識を過剰に持つと，他者とのコミュニケーションの場で自分の話していることばの形式にとらわれ，自分の言いたいことを自由に言えなくなる恐れがある。それは他者とのコミュニケーションを通して人間関係を構築すると言う日本語学習の目的と反している。「形式へのこだわり」意識の変容――「自己表現能力＝正しい形式」から「自己表現能力≠正しい形式」へと言う意識の変容，つまりコミュニケーションは柔軟な表現で支えられているということへの気づきによって，正しい形式の束縛から解放される。このような意識の変容によって，学習者は始めてコミュニケーションの場で形式より重要なのは自分の考えをきちんと他者に伝えることだと言うことに気づかされ，日本語で他者に自分の意見を伝える時に，自らの意見の理由付けや根拠を真剣に考え，伝える力――自己表現力を獲得していくことができるようになる。要するに，「形式へのこだわり」意識の変容は自己表現力の獲得につながるものである。

今後の課題としては「形式へのこだわり」意識の変容と自己表現力の獲得との関係性をさらに検証するには意識の変容が C のレポートの執筆への影響，つまりレポートの質的な変化を詳しく分析する必要がある。

文献

清　ルミ（1990）．スピーチ・ディベート――上級レベルのビジネスマンのために『日本語教育』71.

田中茂範（1997）．英語学習と心理負担《My English 論》　鈴木佑治・吉田研作・霜崎實・田中茂範『コミュニケーションとしての英語教育論――英語教育パラダイム革命を目指して』アルク.

西口光一（1998）．自己表現中心の入門日本語教育『大阪留学生センター研究論集　多文化社会と留学生交流』2.

吉田研作（1997）．自己表現力と対話力の育成について　鈴木佑治・吉田研作・霜

崎實・田中茂範『コミュニケーションとしての英語教育論――英語教育パラダイム革命を目指して』アルク.